

視覚障害者の衣生活に対する意識調査

日本女子大家政 大野静枝 ○多屋淑子 林久美子

筑波大学付属盲学校 綾ヤス子

目的；視覚からの情報を十分に得ることができず、種々の点で日常生活に制約のある視覚障害者の衣生活に対する問題点を抽出し、視覚障害者のための被服の機能性について検討する。今回は、着用研究に先達って、調査された結果を報告する。

方法；アンケート対象者は、筑波大学付属盲学校中等部41名、高等部52名、専攻科47名計140名であり、調査期間は昭和57年11月であった。アンケートは全盲の学生には点字で、弱視の学生に対しては、墨字のアンケート用紙を配布して回答させた。

アンケート内容は、衣生活に対する関心度について7問、購入時に関して8問、着装時に関して11問、取り扱い上に関して14問であり、計40問から構成される。

また、同一アンケートを女子大生（19～20才）43名に対しても回答させ、視覚障害者専攻科の学生と比較検討した。

結果；視覚障害者は女子大生に比べ、一般に衣生活に関する関心度が低いようである。購入時に関しては、女子大生がデザイン、色、サイズを購入時の手がかりにしているのに対し、視覚障害者は、サイズ、デザイン、着やすさを考慮しており、着脱の容易さが必要とされる。取り扱いに関しては、洗濯に対する意識が両者間で異なり、視覚障害者は、なるべく汚さないようにするという消極的的回答がみられた。また衣服の色に対する好みも単純であるなどの傾向が得られた。